

大阪 ■ ■

No.32 2005. 4.30.

大阪哲学学校運営委員会 Copyright©, 2005

哲学学校

■ ■ 通信

【郵便振替】 01170-1-81313

【E-mail】 contact@oisp.jp

【Home Page】 <http://oisp.jp/>

【Net Forum】 ホームページに掲載板を開設

【代表者】 山本 晴義 (校長)

【発行者】 平等 文博 (運営委員長)

【編集者】 平等 文博

【催し場所】 尼崎市立労働福祉会館

阪神尼崎駅下車、駅西の南北道路を北へ徒歩8分

電話 (06) 6481-4561

考えられなかったことを考える

Think the unthinkable!

捧 堅二 (哲学学校講師／政治学)

去年の12月、講演するにあたって、どうい
う論題で講演をするのか、少し迷いました。哲
学学校の側からのご意見もあって、結局「思考
実験で考える政治学入門—非正統的アプローチ」
というタイトルにしました。講演のタイトルと
いうのはバカになりません。話そうと思ってい
る内容に即したタイトルにすればよいのでしょ
うが、ことはそう単純ではありません。また、
いろいろあって、いったんタイトルが決まって
しまうと、そのタイトルに制約されて、困って
しまう場合もあります。今回の「思考実験で考
える政治学入門—非正統的アプローチ」はそん
なタイトルでした。

「思考実験」とはわかりにくいかもしれません。
「物事をより深く考える」ということは大切だと思
うのですが、しかし、これまでと同じ考え方で、
これまでよりもより深く考えるということでは
不十分だと思うのです。まあ、「これまでとは違っ
た考え方は出来ないだろうか」、「これまで自明
(当たり前)と考えてきたことをそのままにせず
に、検討のまな板の上においてみたらどうか」、
「これまで考えられなかったことを考えてみよ

う」というようなことをいいたかったわけです。
英語では、think the unthinkable という言い方
があります。よく使われる表現です。

講演を少し振り返りましょう。前半では、少
数者支配、選挙、議会などの話をしました。そ
の際、わたしは選挙の際の「棄権」について言
及し、「何がなんでも投票すべきだ」、「投票に行
かんバカがいる」とかいうギロンの傲慢さを批
判しました。休憩時に五福久雄さんが、わたし
のところに来て、「なるほど」というような反応
を示してくださったので、ちょっと「我が意を
得たり」といった気持ちになりました(五福さ
んは「経済憂国論」(『哲学学校通信』31号)
でわたしの講演のこのあたりについて触れてお
られます)。

世間では、「棄権はイケナイ」というような
ことが繰り返し語られます。それが各人の思考
を拒絶する自明の絶対的な命題であるかのごと
くまかり通り、選挙のたびに何度も復唱され、
疑いの余地のない絶対的規範ようになってし
まっています。これはよくて「思考の節約」、こ

とによると「思考の抑圧」かもしれません。北朝鮮では棄権は許されません。投票は義務ですし、忠誠の証明でもあります。サダム・フセイン時代のイラクでも大統領選挙での棄権は許されませんでした。もちろん、日本は、北朝鮮や旧イラクとは違います。しかし、日本に民意を完全反映する民主主義が制度化されているわけでもないし、素晴らしい政党や候補者がいるわけでもありません。いやそれらが存在するとしても、人びとが政治についてどう考え、どう行動すべきかは、一人一人の市民の思考と決断にゆだねられるべきでしょう。

去年の秋、ちょうど選挙前だったのですが、わたしはあるラジオ番組に出ました。その時は、小泉首相を中心にお話をしたのですが、録音が最後にさしかかったとき、わたしは「投票するかしないかも含めて、よく考えましょう」と話しました。すると司会者の方が「絶対に投票しなければならぬ」というようなことをおっしゃるのです。わたしが同じ主旨のことをやや表現を変えてもう一度いいますと、その方はまた「絶対に投票しなければならぬ」とおっしゃいました。わたしはこういう定型的な発想を打ち破りたかったのです。「ステレオタイプ」という言葉がありますね。スピーカーが2つのステレオのことではありません。「ステレオタイプ」というのは、印刷の時に使う鉛の原版のことです。紙の上に次々と同じ印字を繰り返すわけですね。

哲学学校での講演の後半は、「人道的介入」を中心に話しました。これはやはり哲学学校の上野山さんのリクエストにお応えしたものです。上野山さんは近代主権国家の「内政不干渉」の原理に懐疑的になっておられるようです。去年、哲学学校で辻元清美さんが講演されました。わたしも参加させて頂き、辻元さんのお話を耳を傾けました。とくにお話が北朝鮮に及んだときは、緊張して傾聴しました。辻元さんが北朝鮮の「主権の尊重」ということをおっしゃったことは鮮明に記憶しています。これは決定的なポ

イントですね。つまり、外部からの圧力、国際社会による、北朝鮮国家の主権を脅かすような圧力で、この国の独裁を倒し、飢餓と抑圧に苦しむ民主を倒すのはダメだというわけです。

もちろん、これも一つの考え方です。しかし、「主権原理と人権原理が衝突するとき、どちらを選択するのか」といった具合に、論点を先鋭に提起して考えてみる必要があったはずで、残念なことに、辻元さんはそこまで立ち入らず、やや小さな声で遠慮がちに「主権の尊重」をチラッとおっしゃっただけでした。しかし、いまの国際社会では、国連も含めて、次第に「主権原理」よりも「人権原理」を優先させることが多くなってきています。もちろん、そのことがただちに外部からの武力行使の正当化につながるわけではありません。

上野山さんから後でうかがったのですが、上野山さんはよく衛星テレビをご覧になるそうです。外国のニュースをビデオにとって反復してご覧になる。まあそうすると、日本の諸メディアが作り出す「常識」というか、「通念」というか、「観念共同体」というか、そういうものどうしてもズレてくるわけですね。ズレは思考を喚起します。批判を惹起します。これまで日本ではあまり「考えられなかったことを考える」きっかけになります。

そうそう、講演の開始の直前、ちょっと「衝撃的」な出来事がありました。なぜ「衝撃」を受けたのか。平等さんからお菓子をいただいたのですが、そのお菓子の表面に「護憲」という文字が焼きこまれていたからです。どうも、哲学学校に来る人はみんな「護憲」を絶対的信念として共有している、と思われているようです。これまでの「護憲」のあり方に懐疑的になるひとなどいるはずがないとばかりに、捧も当然「護憲」だと思われているわけです。まさか改憲派と目される人に対して、「護憲」のお菓子を笑って差し出すことはないでしょうから。

わたしとしては護憲、改憲にこだわらず、憲

法についてラディカル（根底的）に考えてみたいですね。そして、民衆的な方向で新しい憲法について思考したいですね。ルソーはコルシカ共和国の憲法の草案を書きました。みんなで新しい共和国についてギロンしたいですね。その中で国旗や国家についても、主権と人権の関係についても、みんなで考えたいです。明治時代の中頃、自由民権運動の中で下から、民衆レベルで憲法が論議され、憲法草案がいくつも作られました。これについては、色川大吉の『日本の歴史(21)』（中公文庫）や『明治精神史』（講談社学術文庫）で描かれています。また五十嵐敬喜『市民の憲法』（早川書房、2002年）が、市民立法、直接民主主義の立場から新しい憲法の方向性をラディカルに提起しています。

憲法を「信念」や「信条」の問題にしたり、あるいは闘争や運動のための「カード」として利用してはいけないと思います（「九条の会」や日本共産党なんかがこれですね）。少なくともそうしたあり方の限界をわきまえる必要があるように思います。国家や政治体制は、民衆に上から外から与えられ、与えられたものを護る、悪い方向に変えられるのに抵抗する……という消極的な姿勢から脱却し、新しい憲法の構想を通して積極的に国家や政治体制や社会秩序について再検討したいものです。私たちの想像力をそういう方向で働かせることによって、これまでの進歩的な思考では、「考えることが出来なかったこと」を「考えること」が出来るのではないのでしょうか。

怪奇なる事件『文壇照魔鏡』

与謝野鉄幹に思う

松尾 猛省（会員）

二月の哲学講座で元朝日新聞社、木村勲氏の「文壇照魔鏡」を聴講して、はじめてその衝撃的な事件を知った。

それは、与謝野鉄幹個人に対する中傷、誹謗の度合いは常軌を逸したもので、それが明治の中頃に起きた事件であるとはいえ、その衝撃的な事件が何ゆえに起きたのかも定かに判じ難いものもあるが、このような本を生み出した時代背景をみると、政界では、その年の五月に片山潜、幸徳秋水、安部磯雄らが社会民主党を結成、文学界では「岩窟王」国木田独歩の「武蔵野」「牛馬と馬鈴薯」田山花袋の「重右衛門の最後」永井荷風の「地獄の花」などが発表されている。一方、短歌では、正岡子規の根岸短歌会、与謝野鉄幹の新詩社との対立があり、いわゆる、「鉄幹子規不可並称」説の対立が歌壇の中で顕在化

していく。

そのなかに衝撃的な廓清会「文壇照魔鏡」が刊行されたのだが、発行者は大日本廓静会代表者は田中重太郎、印刷者は伊藤重松であるが、実際にはこの住所や発行所は実在しないものであった。

明治34年3月10日でその前年に創刊され急成長の短歌雑誌『明星』の主宰者、与謝野鉄幹の人間性を著しく誹謗する内容で、まさに読むにしのびなく、鉄幹個人を罵倒した内容となっている。

「文壇照魔鏡」が出版されると、諸種のマスコミにその論評が載った。

毎日新聞は「吾人はもとより事実の充分のいちだにあらば鉄幹彼は、確かに文壇の隅にも置けぬ代物というべし、これに対し鉄幹の態度如

何、近代文壇誠に物騒になれり、そのあたり用心、用心」と報じ、日本新聞は「読むに大方事実なり」と報じている。

木村氏、配布のレジメによれば、鉄幹は妻を売れり、鉄幹は処女を狂しめ、鉄幹は強姦を働けり、そのほか、少女を銃殺せんとし、また、強盗放火の大罪、食い逃げに巧妙、詩を売って詐欺、鉄幹は無効手形を乱用、また、鉄幹は詩を売るものなり、友を売るものなり、まさにそれが十数目にわたり誹謗、中傷が箇条書きで羅列されている。

上記が鉄幹は如何なる者ぞと題したものとすれば、第四では文筆における鉄幹では、鉄幹は詩思の剽窃者、文法を知らず、学校を放逐せられたり、鉄幹は心理上の畸形者なりとつづく。

だが、その中傷、誹謗がまんざら根拠のないものでないことは、主な罪状の主旨として掲げてあるのを読むと、当時の人々にとっては全く根も葉もない根拠に乏しいものであったとは、思いがたい様相である。

その理由に、1、内縁関係にあった福山の女学校時代の教え子、浅田さたから同、林龍野への乗換えが持参金一万円を目当てにしたものがある。

2、東京の借家住まいのとき、雇った「下婢キサを口説き落として猥欲を欲しいままにした」併し、借金取立てにあい、朝鮮にひとり逃亡、キサは発狂した。

3、争前後、朝鮮において、良家の処女で彼が猥欲の犠となったものは、殆ど数え切れぬほどあり。

4、京城で少女に挑みかかり、跳ねつけられると短銃を発射、「強姦せられた処女、両国で八十人、

5、韓国のおぼれものの親分と交わり、脅して獲物を得た後、倉庫や建造物に火をつた。国政府の財産を略奪した悪人である。

等々枚挙にいとまなく、その信憑性如何に関わらず、読む側としては啞然とならざるを得ない。

論点は三つの基調音がり、第一の女性問題、第二に韓国での行状、最後は金策の苦境となり、それらから、その筆者は不明なるも、鉄幹のプライベートな行状によほど精通したものでなければ、書けないものとする説があり、頷けるところもある。

鉄幹は同誌の刊行直後に同誌社長と高須芳二郎を告訴、公判は二日後無罪の判決、

詳細は判らぬものの、「両被告を無罪とする。私訴申しだては之を却下する、訴訟費用は原告の負担足るべし」主理由は「誹謗するにたる証拠充分ならず」である。そのあと高須芳二郎、中根駒十郎の連名で謝罪文が出る。

高須側の弁護士は高須論文の16ケ条の罪状なるものは、多くの新聞雑誌が掲げた論調のもとに書いた批評文であることを強調、更に鉄幹の事件後の沈黙を突く。

罪悪を犯した覚えがなければ、当然弁疏しなければならぬのに、それをしなかったのは、鉄幹は慥に弁疏の辞がないのだということを照明するというもの。

このあたりの説を読むと誠に奇怪な感じもする。弁舌の余地がなかったということは幹幹自身にしても、なんらかの心当たりがあったということであろうか。火のないところに煙の喩えていくと、読む側としてはそうとらざるを得ないところもある。

鉄幹の弁明「魔書『文壇照魔鏡』に就いて」は敗訴から一カ月後の「明星」に出る。事件は余一身の私事であり、文壇の問題でないとし、もしこれが刑事上の事件ならば、司法処分をうべき身分、それが無いと言う事は青天霹靂の身でないかと逆説的に居直り宣言、「弁明の地にたつの必要を認めない」とした。

事件の背景には、[新声]と「明星」の焦りと軋轢があった。「明星」の斬新なデザインに対して、四年前に発行の「新声」が遅れと焦りがあったとみるべきであろう。

問題は執筆者が一体誰だったのか、今もって

謎の部分もある。鉄幹が最初想定したように、高須を中心とした新报社グループであることは議論の余地もないとされている。

ただ、高須個人のものか、それとも他が介在しているのかとなると判然としない。

「文壇昭魔鏡」により、鉄幹は多くの読者を失い、文壇的にも経済的にも窮地に追い込まれ、「明星」に対する寄付も三分の一に追い込まれ、その発行が危ぶまれる状況にあった。結果的に晶子のそういうさ中の東上があり、「狂いの子われに焰の翹かるき百三十里あわただしの旅」を生み、「みだれ髪」はその三年後に出る。

弁明後、鉄幹は一冊の歌集の刊行に向かう。鉄幹は編集者としてはすぐれていたが、歌作においては晶子に及び難いと講師も洩らされていたが、それにあわせ鉄幹の「清狂」からの歌も添えて本稿を閉じたいと思う。

(参考文献、『「文壇照魔鏡」—その前提としての考察』 稲垣広和著)

やわ肌のあつき血汐にふれも見で
さびしからずや道をとく君
しのび足に君を追ひゆく薄月夜
右のたもとの文がらおもき
「乱れ髪」 臙脂紫
歌にきけな誰れ野の花に紅き否む
おもむきあるかな春罪もつ子

髪五尺ときなば水にやわらかき
おとめ
少女ごころは秘めて放たじ

清水へ祇園をよぎる桜月夜

今宵逢う人みなうつきしき

与謝野鉄幹

「清狂」

われ男の子意気の子名の子つるぎの子

詩の子恋の子あもだえの子

情けすぎて恋みなもろく才あまりて

歌みな奇なり我をあわれめ

そや理想こや運命の別れ路に

白きすみれをあわれと泣く身

以上



運動誌・研究誌

◆哲学学校の会員や参加者の中には、それぞれの関心からさまざまな市民運動や研究会に参加・運営をしておられる方がいます。そうした方々が、お書きになった文章や活動紹介を兼ねて出版物などを送ってくださいます。最近はそのようなものをいただきました。会員交流の一助としてご紹介いたします。(※各連絡先を知りたい方は哲学学校事務局までお問い合わせ下さい)

●『ニューズ・アソシエーティブ』第224号(2005.4.10)、経済研究会発行

「文化の衝突と原理主義への対抗 日本のグランドストラテジー」ほか

●『季報・唯物論研究』第91号、『季報唯研』刊行会発行

やすいゆたか責任特集「21世紀「人間論」の出发点」

やすいゆたか、平等文博、藤田友治、鈴木正、室伏志畔、ほか執筆

意識について

上野山 定由（参加者）

申し訳ありません、この文章は、老人の妄想です。

平等さんをはじめ会員の方々が哲学通信の紙上で「死について」語っておられます。読ませてもらいまして、当然のことながら人それぞれに御自分の死生観を持っておられる事がわかりました。

老衰した頭のなかにある馬鹿ばかしい妄想を、失礼ですが私も書き並べてみます。

ドンキホーテの従者サンチョの言葉に「深い眠りは死に似て気味が悪い」と言うところが在ります。作者のセルバンテスがそう感じたのでしょう。深い眠りと死とは同じでは在りませんが非常に似たところが在ります。眠り始めは浅く、しだいに深くなり、その熟睡の状態がある時間つづくとき再び浅くなって目覚めとなります。夢は眠りの浅いあいだには見ても、深くなるにつれて見なくなる、つまり昏睡状態、無意識になるのでしょうか。

脳のなかに新鮮な血液が流れていても意識する部署は休憩、目覚めの後の活動に備えているのです。セルバンテスが無意識の状態の時に、何を認識したのでしょうか、何も認識しえない。時間の経過もない無時間、虚無の空間、いや空間と言えるものも意識していない。「自分という意識」をする機能が停止しているのです。生きている人間にとって奇妙な状態です。だがこの状態と対照的な、無意識で行動するという状態の場合もありますが、それは脳のなかで、意識する部署以外はある程度働いていて意識する部署だけが休憩しているのだと思います。

熟睡の場合には、誰もが経験している目覚めがあって、日常の生活に戻れるという安心感で

眠りにつくのですが。

熟睡の無意識と死とを同一に論ずるのは当然無理な点がありますが、熟睡の場合には浅くなったり深くなったりします。しかし、深い熟睡と、死とを比較すれば、どちらも紛う方なき無意識です。従って無意識という観点から見れば、同一に扱っても許されるのではないかと考え、夜には死に、朝には蘇ることに成るのだと心得て寝床に入っています。

意識について少し視点を変えてみます。

人間を含めて動物の意識の根底には、自己保存本能が蠢いていて、その本能の赴くままに弱肉強食の葛藤を繰り返しています。この宿命から逃れるには自己の生命を抹殺しなければなりません。それには自己保存本能の頑強な抵抗があります。それに打ち勝って生命を絶てば、自己保存本能がいくら猛っても自分と言う意識もろとも行き場がなくなります。

ところが、行き場があると言われる方々が居られます。僧侶とか牧師とか呼ばれている方々です。死後の世界、廣大無辺のあの世が存在していて、肉体は灰になっても意識は魂となつてあの世に移住することが出来ると言うのです。ただし、条件があります。あの世の永遠と、あの世とこの世とを照覧しておられる神の存在を信じなければなりませんと言うのです。

私の肉体が健全であった時でさえ、深い熟睡に入れば、空間も時間も自分自身さえも意識しなかったのに、死んで肉体は灰になり四散しているのに、私の意識が健在で、あの世の存在を認識できるとは、いくら自己保存本能の切なる願いであっても信じがたい事です。

この地球上には何十億という人間が住んでい

て、その大半の人々は、自己の保存本能にせきたてられ、色々ある宗教のどれかに帰依しています。信者の一番多いのはキリスト教、次はイスラム教。教徒の数は少ないが、日本人である私にとって多少馴染みのあるのは仏教です。私は若い頃から欧米の翻訳小説に親しんできました。その世界に探る関わっている宗教はキリスト教で、自然と聖書の言葉に親しんできました。恐れ多いことですがイスラム教はしばらく敬遠いたしましてキリスト教の教理を伺うことにします。

聖書の中で、私の保存本能に最も抵触する箇所を取り上げてみます。聖書に関心のある方でしたら御存知の「マタイによる福音書」の22章の34-40「最大の掟」です。

『一人の律法学者が試そうと尋ねました。「どの掟が立法のなかで最大ですか。」イエスは言われた、「心のかぎり、精神のかぎり、思いのかぎり、あなたの神なる主を愛せよ。これが最も大なる第一の掟である。第二もこれと同じく大切である。『隣の人を自分のように愛せよ』律法全体と預言書と（聖書）は、この二つの掟に支えられている。』

死後、あの世の保障を履行してもらえるのが宗教であるから、その頂点に位置する神を崇拜するのは当然であります。しかし『隣の人を自分のように愛せよ』は自己保存本能にとっては受け入れがたいことです。聖書には、これと同じような心の持ち方を語っている言葉が多くあります。一つ二つ取り上げて見ますと、同じくマタイの5章38の箇所に『目に対しては目を、また歯に対しては歯をと言われたことは、貴方たちも聞いたことである。しかし、この私は貴方たちに言う、悪人に手向かうな。むしろ、「あなた」の右の頬に平手打ちを加える者には、もう一方の頬をも向けてやれ。』皆さん、ご存知の自虐的なものばかりです。キリスト教徒でない私でも、それらの言葉に従うべきだと思うのですが私の保存本能が許しません。躊躇っている

のは私だけではなく、多くの人々がそうでしょう。

人類が音声もまともに出すことも出来なかった何万年か昔、隣に倒れている仲間にいたわりの言葉も与えられず、其のままにうち捨てて立ち去った、それから数千年か、何万年かたち、聖書に書かれてあるような洗練された言葉ではなく、片言の言葉にせよ隣人に対して憐憫の言葉をかけられるようになった。そして、さらに長い歴史的時間経過があって、現代に至り、ある出版社の『マタイによる福音書』での解説欄では、「マタイ福音書はヘブライ語からの翻訳ではなく、はじめからギリシャ語の作品であって、著者は無名のユダヤ人キリスト教徒で、80年代に成立」とあります。

1900年ほど前の過去に戻りますが、何人かのユダヤ人キリスト教徒達が書き上がったばかりの『マタイによる福音書』をまえにして、それぞれがどのように受け取ったのでしょうか。もちろん教徒たちは、書かれてある其れらの言葉は、耳では熟知していたでしょうが書き物として目の前にした教徒は、書かれてある事柄の実行を強く迫られたのではないのでしょうか。第一の「神を愛する」は口先で済みますが、「隣人を自分のように愛する」には、一つのパンでも、半分は隣人に与えなければならないと言う、具体的行動を示さなければなりません。

キリスト教徒たちの意識のなかに渦巻いている自己保存本能は、パンを与える代償として天国に迎えられると言う保障の確認を求めています。そして、2000年近い年月を経過して現在に至りました。しかし、現実の世界では、客観的に見て何の印も与えられなかった。与えられたと語る牧師の方々が居られますが、あまりにも切なる願望による錯覚にすぎません。

何も与えられなかったにしても、現在に至るこの2000年の間、教徒たちは、未来の天国における自分の姿を想像して、『隣人を自分のように愛します』と朝夕斉唱してきたようです。

天国と言う幻想を抱かずにして、教徒の周りで生活を共にしていた当時の人々の鼓膜にも、さらに その人たちの意識にまでも、祈りの言葉は響いた。しかし、その人たちの自己保存本能は敵意を持って、この祈りの言葉を拒否し続けていただろうと思われまます。

2000年のあいだ、教徒たちの祈りの声は絶えなかった。さらに人間は文字を印刷する技術を獲得したので、容易に自分たちの意志感情を音声と視覚によって強く伝達できるようになった。そこで教徒である、ないに関わらず、人類全体の意識に、従来よりも声を大にして『隣人を自分のように愛せよ』と迫ってきました。人間の意識は、朝に夕にこの言葉を耳にし、この言葉と対峙してきましたので、ついには意識のなかで自己保存本能の存在が希薄になり始めたような微かな兆候が見られるようになりました。

その証は、この地球上で難渋しておられる人々に、自分の身の危険も顧みないで、救いの手を差し伸べておられる方々です。何らの報酬も受け取らない、報いとしてのあの世の天国も無関心、黙々として、困っておられる人々を自分の隣人として助けておられる方々です。

何故このような人々が、この地球上に存在するようになったのか、その一つの理由は、やはり聖書の存在である、教徒であるないに関わらず、幼いころから聖書の言葉の存在を意識して成長し、自分の行為を無意識のうちに絶えず聖書の言葉と照らし合わせて、自分を省みて、そして生涯を終える。このようにして聖書の言葉と人間の自己保存本能との確執は、永い永い時間経過のうちに、ごく少数のある人間達の意識を、自己保存本能を希薄にし、何の抵抗もなく無意識のうちに無償の行為をするようになってきた。保存本能を絶無にすることば不可能であるにしても微弱で取るに足らないものになっている、ごく少数のこの人たちは、意識のなかに自己保存本能の存在を許さない新人類誕生の兆し大阪哲学学校通信 No.32

かもしれません。しかし話が此処までくると、これは間違いなく老人の妄想で、キリスト教のはなしは此処までにして仏教の話に移ります。

仏教は、日本人である私には子供のときから馴染みであるのに、私にとっては葬式宗教で、各宗派は何を説いておられるのか判っていないのです。多くの宗派が在りますので、各宗派ごとに教えをお聞きするのは容易なことでは在りません。たまたま『般若心経』の本を開いて見ますと。解説に「日本の仏教は殆どすべて大乘仏教、根本思想は空の理法を悟ることである。空の理法を簡単に説けば、この短い『般若心経』一巻に収まる。」とあります。

私がここで取り上げるのは、あのお経に付き物の漢字の羅列ではありません。サンスクリット語からの訳で、私の妄想を語るのに都合のよい箇所だけを抜粋してみます。

『この世においては、物質的現象には実体がないのであり、実体がないからこそ、物質的現象で在り得るのである。実態がないといっても、それは物質的現象を離れてはいない。また、物質的現象は、実体がないことを離れて物質的現象であるのではない。』

『生じたと言うこともなく、滅したと言うこともなく、汚れたものでもなく、汚れを離れたものでもなく、減ると言うこともなく、増すと言うこともない。』『実体がないという立場においては、物質的現象もなく、感覚もなく、表象もなく、意志もなく、知識もない。眼もなく、耳もなく、……』と、なく、なく、が続くのですが、このお経は有名で、たいていの方は良くご存知ですから、これ以上は書きません。このお経を、わたし流に解釈すれば、私は自分の身体を持っていますが、この身体の外観も、子供のときの外観、中年のときの外観、現在の老人の身体と変化しています。厳密に言えば刻々と変化しています。何歳の時の私が本当の私なのかということになります。同様に私の肉体を構成している物質も短い期間で更新しています。い

つも私、私と意識しているボケてきた脳も御同様です。従って、これこそ私だと言えるものは、どこにも存在していません。このことが、このお経の言わんとしていることだと勝手に解釈しています。

私はこのお経をかなりの年配になってから読み、タイの捕虜収容所の病棟でマラリア患者として収容され枕を並べて寝ていたことを思い出しました。隣に寝ていた患者が不意に飛び上がり大きな声で二言三言叫んだかと思うとばかりと倒れました。高熱のときの病症です。あとで本人は全然意識していないと言っていました。水は百度になって、はじめて沸騰し、零度以下になって凍結するのに、人間の意識の場合には平熱37度から、たったの5度の上昇、42度付近で錯乱してしまう。日頃、精神とか、魂とかを口にしていた人間の意識は何処に逃避してしまったのでしょうか。いや逃避ではなく変質してしまったのではないか、体温が下がれば元の状態にもどる、ちょうど水蒸気が冷却されれば水になるように、単なる物質の現象。隣の患者が平熱に戻って何事もなかったような様子をしている、その姿を見て思わず口に出た言葉は『唯物論』。人間は只の物質、いやすべての生き物は物質によって構成されていると受け取りました。『唯物論』の『論』は語呂合わせに付けたもので、私には『論』と言えるような筋道の通ったものは在りません。

テレビで世界の天気情報を見ていると、一番低いので北京の摂氏マイナス11度、一番高いのでシンガポールの摂氏38度、その温度差は49度です。これはたまたま測定した場所での気温差で、地球上での一番寒い極地と赤道直下の砂漠地帯とでの気温差は、もっと大きく百度近くあるかも知れません。しかし絶えず変化しがちな自分の体温を常に37度近辺に保持しておかなければと懸命になっている人間の身体にとって、理想的な気温は20度前後のようです。

春とか秋に公園を散歩していて、白い雲の美しさに見とれ、暑くも寒くもなく空腹でも病気でもなければ、あの世ではなく、この世での天国であり極楽だと受け取っています。しかし、この天国が築き上げられる為の必要条件は厳密に数え上げれば無数にあるようです。単純に考えて、この地球を水の惑星と呼ばれているように、水の存在です。地球はほかの惑星と違って、太陽の熱で温められた海水は、水蒸気となって蒸発し、その水蒸気は上空の冷氣によって微細な水の粒の集団、雲となります。その雲を地球の引力がしっかりと握り締め、雨として、地球に引き戻していますので、地球の表面では水が潤沢に在り、そのお陰で無数の動植物の存在が可能となっています。

この太陽系で、地球のように水をしっかりと握りしめている惑星がほかにも存在しているのでしょうか、無いとしたら水の存在は稀有な現象です。しかし、さらに類を絶した現象がこの地球上で展開されています。

『般若心経』を読み、今では、私は種々の物質によって組み立てられ、ある程度の自由さをもって行動することが出来る一つの物体であると、自認しています。その自認作用は頭部に位置している脳の働きである意識作用です。眠っているのではなく目覚めている意識の働きです。脳を組み立てている物質は、私たちが毎日食べている食べ物の中にあるのでしょうか。胎内から持参した特別の物質があつて、それと通常の食べ物とで脳を補強しているにしても、墓に至るまでの年月、持参した物質は尽きてしまうでしょう。やはり脳の発育補強も日々の食べ物によってということになります。

よって、脳は特別な物質ではないとすると、意識するという働きはどうして発動するのでしょうか。これは憶測ですが、組み立てる素材は私たち日々の食べ物からですが、その食べ物を受けとって脳自体が自分で自分を補強していると憶測されます。

私は鏡を見て、鏡に映っている私の頭部のなかに鎮座している物質の存在、これこそ私であると自分に言い聞かせています。とは云っても何も特別な存在ではなく機能の衰えた老朽化した物質の自己認識です。ビッグバン以来この宇宙空間で散在している大小さまざまな無数の星、つまり存在している膨大な量の物質のなかで、自分は物質であると自己認識した物質が過去に

おいて存在したでしょうか。そして現在でも、この地球上で自分は唯物論者であるという信念を抱いておられる方々を除いては、自分は物質であるという意識はお持ちではない。私は夜空を見上げながら、未来においても、この膨大な宇宙空間で、自分は物質であると自己認識できるような物質の存在が可能だろうかと考えています。

〈知の歴史〉 入門講座の予定

〈知の歴史〉入門講座は、大阪哲学学校がかかげる基本視点—生活と哲学の結合—にたって、通説にとらわれることなく今日的な問題意識から哲学や哲学史をもう一度見直し、「哲学すること」を新たに学び直そうという趣旨で企画いたしました。

共通のテキストはありませんが、全体を通しての参考文献として新しいビジュアルな哲学史の本、ブライアン・マギー『知の歴史』(BL出版、4800円+税)を推奨します。

《〈知の歴史〉入門講座・第2シリーズ》

「19世紀ドイツ哲学から、わたしが学びとるもの —カントからヘーゲルまでを見通して—

講師・西川 富雄さん (立命館大名誉教授)

●第1回 5月14日(土)「カントから、なにを学びとるか？」

主として、「純粋理性批判」の「理性批判」から、形而上学(特に、自然のそれ)を考える。

●第2回 5月28日(土)「フィヒテのどこに、わたしは惹かれるか？」

かれの「知識学」を、「行為=存在論」の試みとして読む。

●第3回 6月11日(土)「シェリング哲学の何を、わたしは、論じてきたか？」

多彩な変貌を遂げたシェリングを、1には、自由論期を中心に、2には、自然哲学を軸として、彼の現代性を探っていきたい。

●第4回 6月25日(土)「ヘーゲルは、シェリングを超えることができたであろうか？」

通史は、イエスという。わたしは、むしろ、ノーの方に重点をおいて、シェリングを見る。つまり、「西洋近代」を頂点にまで推し進めて哲学を仕上げたヘーゲルに向き合って、シェリングは、その「近代」を超えるものを用意していた。わたしは、そこに、彼の現代性を見る。

■いずれも尼崎労働福祉会館(06-6481-4561)にて午後1時半～5時半ごろ

■参加費：各回千円

■問い合わせ先：contact@oisp.jp

中村りょう子さんのご質問について

捧 堅二（講師）

わたしの講演をお聴き頂き、またお手紙（『哲学学校通信』31号、05年1月）まで頂戴しまして、どうもありがとうございます。哲学学校で講演したのは、3回目か、4回目だったと思います。お手紙のご質問にお答えします。

①わたしの名前は「捧」（ささげ）です（木偏ではなくて、手偏です）。わたしの母方の姓です。母は乳児の時（大正時代）に両親と一緒に新潟県の現在の燕市（当時は西蒲原郡燕町）から大阪に出て来ました。いまNHKで大河ドラマ『義経』をしていますね。このドラマの原作者の宮尾登美子さんの小説に『蔵』（中公文庫）があります。TVにも映画にもなりました。その舞台になっている亀田（現在の亀田町）は燕に近いところです。『蔵』の女性の主人公はわたしの母とほぼ同年代（大正10年生まれ）と思います。わたしは講義の際、学生にいろんな本を薦めます。『蔵』もその中の一つです。昔の日本の様子がよくわかるからです。

10年ほど前母を連れて、はじめて燕へ行った時に、「昔、都からエライ人（国司でしょうか）が越後に来た、お供をした人の中に先祖がいた、「捧」という姓もエライ人に何かを「ささげる」というところから来ているのではないか……」と親戚から聞きました。燕市や隣の三条市には「捧」という姓の家が沢山あります。新潟の人は

大阪へ行く人よりも、東京へ出る人のほうが、圧倒的に多いのです。戦前も戦後もそうですが、しかし、戦前は大阪へ働きに出る人も多少はいたようです。これには大阪が朝鮮や満州に近いという事情があったようです。この話、新

潟で若い頃大阪で働いていたという人から聞きました。

②高野山との「縁」ですが、特段の「縁」のようなものではありません。高野山で非常勤講師として政治学を教えていた先生がおられ、その方に紹介して頂いたという「縁」です。わたしとしては、山の上であろうが、下であろうが、自分が学んできたこと、学生諸君に学んでほしいと思っていることを教えるだけです。ただ、地上から離れているせいか、山の下の方よりも自由にいろんなハナシが出来るということはあったかもしれません。遠慮なく、ズバリ、いろんな話が出来たということです。学生の反応も一般の文学部の学生と同じような反応ではないかと思います。僧侶の先生が少なからずおられますが、ふつうの人と変わらないですね。社会の常識が通用しない人もいないわけでもありませんが、それが宗教と関係があるのかどうかはわかりません。

③吹田の家から高野山まで3時間半ぐらいかかります。特に難波からの電車が長いので、たくさん本が読めます。なんか自宅よりも電車のなかのほうがよく勉強で来る感じですね。それで高野山へ行く日の朝は、何を鞆のなかに入れて行くか、少し迷います。まず、専門書、雑誌などのコピー、そして娯楽的な読み物と三段構えですね。電子辞書も持参します。20年あまり、そういう生活をしてきました。以前は行きも帰りも猛烈に読むことが出来ましたが、最近は帰りの車中はやや疲れ気味で、英語の本をどんどん読むわけにはいかなくなりました。

ふと本から目を離し、車窓から外を見ると

青々とした木々が見えたり、桜が見えたり、また水墨画のような風景が見えたりもしました。近頃、高野山大学では、志願者、入学者が減少し、学内は閑散としています。カリキュラムを変え

て、開講科目を減らすとか、学科専攻を減らすとかしています。教員も減らしています。わたしもこの3月いっぱいこの大学を去ることになりました。

人生について考える (6)

西山 覚 (会員)

人生の目的は幸福になることにあります。何が、あるいはどんな状態が幸福なのかについての定義は難しいのですが、とりあえず、人生の目的は幸福の追求にある、としておきます。ところで、人生の目的は幸福になることにあるといっても全ての人が幸福になれるわけではないことは自明のことのよう思われます。幸福になることを望んでも、努力しても不幸な結果に終わる人達が非常に多いのが現状だと思います。人生においては即自的には幸福でも不幸でもありません。幸福と不幸は表裏一体で、人生においては生活をしていくなかで、いろいろと苦悩していくなかで、反省的に不幸というものを自覚、もしくは理解していくのですが、その不幸な体験、自らの経験を通して、幸福というものが反省的に自覚されてくると言えると思います。人生においては不幸な経験や幸福な経験がいれかわり、たちかわり自らの体験として感じることとなります。ここで大切なことは人生において苦悩するということと幸、不幸ということとは区別する必要があるということです。

幸福になるということはネガティブには、特定の苦悩、苦しみを除去することではあっても、苦悩一般、苦しみ一般を取り除くことではありません。ある意味で幸福というのは他者と、特定の苦悩、特定の苦しみを共有することにあるからです。幸福というのは相対的な概念であり

ますが、絶対的な概念でもあります。幸福を追求するというのは相対的な目的ではありますが、絶対的な目的でもあるからです。もちろん幸福は個人的に追求する面もありますが、基本的には、社会的に協力し、連帯して追求するものだと思います。完全に全てが不幸な人生や完全にすべてが幸福な人生というものは存在しません。人生を総括して不幸な人生だったとか幸福な人生であったとか吟味することはあまり意味がないように思われます。幸福とはポジティブには対象へ向かう情熱でもあるのです。

一回限りの人生においては努力すれば何とかなったという場合もあれば、どうしてもやむをえなかったという場合も歴史的に確実に存在するからです。

人類の歴史において奴隷制や封建制や資本主義という人間の人間性や自由の否定に繋がる制度、システムを経験しなければならなかったというのは必然的なことであつたのです。この不幸な事態、社会的な制度としての抑圧システムを経なければ人類の自由や幸福を、人間の解放を実現できなかったというのは歴史的必然であつたのです。20世紀の二度の世界大戦もソ連における国権主義も歴史的には避けることができなかつた必然的な出来事であつたと言うことができます。ただし、歴史における一回限りの、初めての出来事である限りにおいてはこのことで

すが。そういう意味においては歴史の進展過程というのは無慈悲なものであると言えるでしょう。

人間の解放や自由の実現に到る道というのは過去の過ちの反省、総括を通して初めて実在的可能性というものを提示することができるのです。過去の社会的失敗や挫折というものを通してしか社会的進歩というものはありえないでしょう。ソ連の1980年代の上からの改革、民主化というものも、市民社会の成熟、アソシエーションの進展というものがなければ実現できないということを証明しています。人間の解放や自由の実現というものの結局は、人々、自らが自覚して闘い、勝ち取っていくしか方法がないのだということでしょう。

繰り返し言いますが、全ての人が救済されるわけではありません。全ての人が幸福になれるわけでもありません。このことは歴史がすでに証明していますし、これからもそうでしょう。人間の歴史というものは偶然的なものや運命的なものによって深く彩られています。何と理由をつけようが、不幸な人生、悲惨な出来事というものは存在します。何と理由をつけようが、理不尽な死や不条理な死というものも存在します。不幸な人生や悲惨な出来事、理不尽な死や不条理な死というものは、時代によって差異はあるものの、過去のあらゆる時代を通じて存在したし、これからも、未来においても存続するものと思われる。なぜなら人類の歴史において、どんなに事前に努力しようとも失敗や過ちを完全になくすことはできないからです。

しかしながら、社会環境の変化、対自然、対人間の関係の変化によっては人生観というものも変化するもののように思われます。いつの時代においても人間の不幸や人間の死というものが同じように受け止められていたわけではないからです。資本主義社会における死生観とアソシエーションの進展した社会における死生観とは本質的に異なるからです。

万人の万人に対する闘いの社会、市場原理による弱肉強食の社会、権力的権威主義的社会における死生観と対等な個人が合意の形成によって運営される社会、アソシエーションによる連帯の社会における死生観とを同一視してはなりません。同じように疎外された状況における幸福観と疎外が克服された状況での幸福観を同一視するのも間違いでしょう。他者と比較して自らの幸福や不幸を確認するという図式は主体的に人生を生きようとする人間にとっては、誤った観念だと言うことができます。

幸福というものは歴史的に実現されていくものではありません。それは現実というものをいかにとらえるか、いかに把握するかという主観的要素と深く関わっているからです。幸福という状態はいつの時代にも存在しましたし、不幸という状態もいつの時代にも存在しました。おそらく、これからの時代についてもそのように言うことができると思います。

現実というものを固定的な不動のものとしてとらえるか、媒介の揚棄の結果としてとらえるかによって、幸福観も基本的に二つに分かれるように思えます。

現実というものを静止的なものとして把握した場合には、実証主義やニヒリズムの立場に到りますが、現実というものを媒介の揚棄の結果として動的にとらえた場合には、実在的可能性という視点を持つことになり、希望というものを見出すことができます。希望というものを持つことにより、理念を持ちながら生きていくことができるのではないのでしょうか。理念を保持しながら生きて行くということは、ある意味で苦しいことではありますが、人間の尊厳というものを維持していくためには必要不可欠なことだと思います。

特定の時代、特定の時期において圧倒的多数の人たちが不幸な盲目的な状況に陥り、はかりしれないほどの犠牲を強いられるというのは歴史的事実だと思います。問題は、それをどのよ

うに捉えるか、ということにあると思います。理念を保持しながら生きて行く人間にとって、幸福という概念を個人的レベルに矮小化しようという意識のあり方には問題があるように思います。「現実を止揚する運動を共産主義と呼ぶ」とはマルクスの弁ですが、これは諸個人が、目的意識的活動であるアソシエーションを展開していく過程の中に社会主義が実在するというようにも理解することができるでしょう。現実を止揚する不断の活動性の中に幸福という概念を位置付ける必要があります。それがポジティブに、情熱的に生きるということではなでしょうか。

幸福という概念は主観的な感情や情念の、欲求の充足状況に限定するのは、あまりにも動物学的、生理学主義的な理解の仕方と言えると思います。幸福というのは、現実の中の自分の置かれている歴史的状況を対象化して、客観的に意識することにより価値判定として自己了解する、そのあり方でもあるのです。しかしながら、人間というのは、あくまで自然の一部であり、欲求を持った生物なのであり、理性をもった動物なのです。理性が身体から抜け出して、それ自体であるということはないのです。

これは、また、アソシエーションにおいて感性的実践をしていく過程において、「実践と反省の往復運動」を繰り返していくことにおいて確認されていくものなのです。本質上、社会的、類的存在である人間にとって、実践のその時々成果を反省的に総括する過程において、価値判定がおこなわれ、幸、不幸が認識され、実感されるものだと思います。

勿論、幻想やイデオロギーにおいても倒錯的に幸、不幸が認識され、実感される場合もあります。宗教的形態においてそれらが認識、実感されることもあります。もちろん、幸福という概念も実体化することはできません。現実存在する、主に人と人との関係において意識される幸福は、具体的な形態としては一回限りの特

殊な形態のものなのです。具体的に存在するのは一度限りの多様な形態のものでしかありません。

抽象的な規定、抽象的な思考形態においては「人間達は生活をする」というのは真実です。これは目的面から見た場合でも同語反復の規定でもあります。「人間達は生活をする」。何のために？「生活をする」ために、というふうにです。

この規定において幸福というのはどのような地位を占めるのでしょうか。人間というのは「生活」をする存在なのですが、有限な個体として存在する人間にとっては「生活」するという行為は有限なものなのです。したがって、有限な時間と空間としての「生活」を生きる個人としての人間にとっては幸福というのは「生活」の目的にもなりうるのです。人間は有限な感性的存在だからこそ情熱を持って幸福を追求する、というように、抽象的には言えるかも知れません。理念と情熱を持って「まずはやってみる。それから考える」という言葉がありますが、日々の人間の生活においては大切なことではないでしょうか。

資本制システムの中に組み込まれ、資本制システムの矛盾が蓄積されていくなかで、膨大な数の人々が苦しみ、不幸な状況に追い込まれています。資本制に替わるシステム、資本制に替わる具体的な代案が求められています。歴史的、時代的制約から、救済されずに一生を終える膨大な数の人たちが存在するということを直視する必要があります。過去の歴史において失敗して挫折した過ちを繰り返さないためにも。歴史において、既に経験したことについて、同じ失敗を繰り返すというのは、馬鹿げており、初めての体験ではない以上、何倍も罪が重いと言うことができると思います。

人間が本来社会的で自由な存在であるという証は人間の限界超出性というものを確認することにより理解できると思います。人間を取り巻く対自然、対人間という環境に規定されながら

も、目的意識的活動を通して、対自然、対人間と関係すること、対象に働きかけ、環境を変化させることにより自らの本質、あり方を変化させるという活動そのものが、人間の本質なので

す。常に自分を取り巻く普遍的構造をもった環境に対して、実在的可能性を対置していこうという姿勢が人間の幸福と深く結びついているのです。

置き引きにあう

中村 りょう子 (会員)

3月12日、山本晴義先生のご講演第一回目なされた日でしょう。この日、私は京都市の「女性企業家支援」の催しに「ギャラリー星座」オーナーとして参加しました。京都、岡崎、「勸業館」です。外は曇混じりにもかかわらず、イベント会場はなかなか盛況です。

不慣れな私は、朝から緊張が続きました。午後3時ごろには「確かな手応えがあり、買手もあられ、快い、気分の集中を覚えた時、丁度、「プレゼン様の短いスピーチ」を求められて、講壇に上がりました。百数十人を前に、怖くて、「小さい鈴」を初めに、りんりと振ってマイクにむかいました。途中、司会者と掛け合い漫才になり、汗をかいて席に戻った次第です。

その後1時間足らずで賑やかに催しは終了しました。急ぎ自分のブースの片付けに取り掛かった時、大きめのショルダーバッグが消えている事に気付きました。携帯電話、現金、鍵束、名刺、「JR、私鉄プリペイドカード」等、貴重品一切です。

初めての体験です。まず、主催者に伝えました。「一文無し」は悪くありません。荷物とこの身のみを7、8キロ西へ運ぶだけです。会場を出てすぐ傍

にある交番に訴えました。現場検分と、被害届を作制して貰うのです。(警察官が書く規則!なので2時間余りも掛りました。)

「昨今、盗難、置き引き、すごく多くなった」、そうです。この間に次々盗難被害の届け出に50歳と47歳の男性二人が相前後して来まし

た。共に少し早い白髪のおつむりです。夫々、一家の「大黒柱」氏です。物静かなインテリ風。私は「官」氏たちと、並んでカウンター内、彼らは台の外で、プライベートな事項に答えなくてははいけません。私の目を見ながら応えています。ひとり、ひとり、時間も別個、なのに私の方に視線が来ます。見も知らぬ私にも個人情報のご開帳となります。同情に耐えません。(互いに、この状況も嫌だなあ。——暗黙の共感。???解りません。)

帰宅のタクシーの中で考えました。ふーっと

1 若い警察官たちの労働と報酬、彼らの暮らし。

2 災難に伴う二次的被害、被害届けに訪れた各々の、男性とカウンター越しの私に共通した奇妙な恥ずかしさ。

真っ暗な夜道、に、むこうから、サイレンをならしながら、救急車来ます。行き抜けました。

あの車に今、乗っていない私。事故でも急病でもない。明日からも働ける。今だって。もっと、注意深く、用心しつつ、働ける。(小難に過ぎない。)

鍵束、すべての扉のキーを替える。電話、カードのロック依頼。但し、「本日の営業時間は終了しました。」あれ、あれ!一方通行のアナウンスのみ。(トラブル発生に土、日、は無い。のに!)

名前、住所、鍵、3つ揃えて、お盗みあそば

して頂いて、今や住まいも危ない。

「職人、物を作るタイプの人間は制作中以外は、ぼうっとしているか、好奇心、赴くままに、気持ちちは四方八方へ飛んでいってる。巷は楽しいし、人々は面白い。見るものがいっぱい。油断したまま、暢気に過ごしたい。」

****昨夜、強盗は来ず、きょうは日曜日、見れば、身辺不用品、多過ぎる。***

気付けば、自分の身が物置の中の「ごみ」のよう。物等は買う時より、捨てる事の方に、パワーを必要とします。

年来、内々に求めていた、「処分する為の、エネルギー」が湧いてきています。

ここ数年間、自身が「心もとなく」なって、もがきました。通奏低音のような「鬱症状」と、人知れず伴走していた「自身」からやっと、脱しそうな気力が充ちてきています。

自分だけでは、「心の部分に於ける、緩やかな再生」さえ容易でない事を経験しました。幾人もの人間関係、いくつかの事柄、幾シーズンかの風物、沢山の芸術作品、ペット……。

この度の、「置き引き被害」の初の体験も、立ち上がってゆく、「きっかけのひとつ」って思う。これはおもしろい。

万葉歌物語「妹が名は千代にながれむ」

やすい ゆたか（会員）

妹が名は 千代に流れむ 姫島の
小松が末（むれ）に 若生すまでに

「まさかあの娘が身投げをすることは、あんなにやさしい笑顔に戻ってくれていたのに。そりゃあ彼女がああ痛ましい想い人の戦死の知らせを受け取ってからの哀しみようは、いつ死んでも不思議はないくらいでした」河辺宮人はこう語っていたのではないか。河辺宮人はおそらくペンネームであろう。彼の家柄は地方豪族である。おそらく国衛の役人になっていたのだ、宮人というペンネームにしたようだ。姫島は彼の出身地であったかもしれない。姫島を実質的に支配していた豪族の子弟と考えていい。

姫島といえば肥前の国、国東半島の突端の沖合いにある離島である。この島は遠い伝説では、新羅の国から逃れてきたアカルメ姫が、暴力をふるう夫天日矛から身を隠された島だということである。都に近い難波にも姫島があるが、天

日矛が追ってきたので、肥前の姫島から難波の姫島逃れたという説もある。この島の長老たちの話では、こちらの方が本家で、都が東方に移った時にこちらの地名がたくさんあちらに移されたということだ。それがもう何百年も前のことか、つい最近のことなのか、今ではよく分からないという奇妙な話なのだ。

この島は瀬戸内にあつて筑紫と難波さらに紀伊を結ぶところにあり、紀伊を本拠とする久米の集団の要衝だった。和銅四（七一）年には、かつてはオキナガタラシ姫に率いられて半島を席卷したという久米集団は、白村江の敗戦以来衰退して、すでに伝説的な存在だったが、姫島の男たちは当時でも大唐国との交易を試みたり、蝦夷征討軍に進んで参加したりする勇猛で進取の気質を発揮していた。

娘は「久米の若子」とよばれた屈強で勇猛な漁師の青年に恋をしていたのである。青年は娘と別れるのはつらかったが、貧しい漁師生活では娘を喜ばせることはできないと思って、軍団

に志願し、蝦夷征伐に参加させてもらったのである。「きっと手柄を立てて出世するから待っていてくれ」と言った。娘は姫島の漁師のままでいい、元気でたくましく生きてくれればそれでいいのだ。蝦夷征伐などに参加して殺し合いなどしてほしくないと泣きじゃくって止めた。だが男は自分の決めたことを娘の涙で左右するような人間ではなかった。

河辺宮人は肥前の府内の国衙に勤めていたが、年に何度か姫島に戻っていた。「久米の若子」が志願した時も宮人が世話をやいてやったので、娘からはずいぶん恨み言を言われたものである。そして出征したらまったく音沙汰はない。蝦夷征伐は想像以上に大変で、獣道や泥道に迷い込んだり、冬は雪に閉じ込められてしまう。敵に遭遇しないで何日も山の中で苦しい行軍が続くのである。また敵地に乗り込んでいるから、こちらの情報はほとんど筒抜けである。とうとう「久米の若子」が率いていた部隊が、夜間に奇襲され戦死したという知らせが届いたのである。

その知らせを河辺宮人は娘に伝えに行かなければならなかった。実は河辺は娘から出征の便宜を図ったことで激しい抗議を受けていたが、その切なる思いに心を打たれていらい、その娘のことが気になって、島に戻るたびに娘の家を訪ねて、慰めと励ましを言っていた。やがて娘も何かいい便りをもたらしてくれるかもしれない宮人の訪問を楽しみにするようになっていた。宮人は次第にその娘が自分の胸の中で大きくなっていくのを感じていた。

戦死の知らせを告げたとき、その娘は宮人の胸にすがって激しく泣きじゃくったのである。それから毎月一度は、宮人は娘のことが心配で島に帰った。そして娘を慰め元気付けようとした。今にも死んでしまいそうだった娘も、そのかいあってか、やがて明るさを取り戻し、元気に働くようになったのだ。その様子で安心した宮人は国衙の仕事も忙しくなったこともあり、三月ほど島に帰らなかったが、戻ってみるとな

んと娘は身投げして死んでいたのである。

難波瀉 潮干なありそね 沈みしに
妹が光儀を ^{すがた} 見まく苦しも

島に戻った時、まだ屍はあがっていなかった。宮人は無残な娘の亡骸に直面するのはとても苦しくてできないと思っていた。この三月、実は島に帰りたくて仕方がなかったのだ。宮人にとって娘の存在はどんどん大きくなっていった。しかし戦死の知らせからせめて一年間は自分の思いを告げることはできないと心に決めていた。こんな結果になるのだったら、思いを打ち明けるべきだったと後悔したのである。しかし娘の妹が宮人を浜に呼び出して、姉の思いを密かに告げた。「あなたのせいよ、あなたが優しくしすぎたから、姉は死ぬしかなかったのよ」、「それはどういう意味だ。私はただ元気な笑顔に戻ってほしくて励まただけだ。それがどうしていけないのだ。」「姉は久米の若子を夫と心に決めていたのよ。だから戦死すれば、いさぎよく後を追う覚悟だったの。それをあなたが優しく励ますものだから、なかなか死ねなかったの。そして癒されることで、あなたへの愛が芽生え、膨らんできたのよ。そのことが夫と決めた人に済まなくて、それで死ぬしかなかったのよ。」

なんと言うことだ。私は娘を救うことができなかったばかりか、かえって死に追い詰めたのか、私が、私の愛が娘を殺したというのか。宮人は頭がくらくらして浜にへたりこみ、はげしく胃の中のものを戻した。そして身を振らせて号泣したのである。宮人は娘の屍を見たくはないと思った。どんな言葉をかけたらよいのか、謝ればよいのか、責めればよいのか、それとも私まで死ぬべきなのか。ああ激しく変化する難波瀉の潮よ干いてくれるな、とても苦しくて娘の顔は見れないのだよ、宮人は心の中で叫び続けた。

風早の 美保の浦廻の 白つつじ
見れどもさぶし 亡き人思へば

風早浦は現在の広島市付近にあるが、この歌の風早は地名と受け止めることもあるまい。風が強く吹く美保の浦である。美保も地名ではなく浦が美しいことを意味している。浦廻(うらね)は出入りの激しい曲がりくねった浦である。美しい景色だが、さびしい雰囲気がある。そこに咲いている白つつじは純愛に殉じた娘の象徴である。「白つつじ」の花言葉は「変らない美しさ」である。

娘の屍を前に河辺宮人は立ち尽くしていた。私がこの娘を愛したから、この娘を死に追いやっただとしても、それは私の罪ではない。もし愛さなかったとすれば、この娘は「久米の若子」の死の知らせを聞いてすぐに死んでしまっていただろう。私の愛はこの娘の死を遅らせたのだ。しかしこの虚しさはどうだ、やはり娘に死なれてしまったのは、私の愛の無力を意味している。

娘も久米の若子を待ちながらこの白つつじを見ていたのだろうか。そして変らぬ愛の美しさを信じようとしていたのだろうか。ところが戦死の知らせを聞いてから、彼女は久米の若子への思いが永遠のものになったと思い、恋に殉じようとした。たとえ自死しなかったも、思いの中で若子への愛は永遠になったのだ。だが、私への想いが膨らんできたときに、若子への想いの熱さが冷まされかねないことに気づき、それが若子に済まないと感じたのだろう。

それなら娘の想いが膨らみ始めたときに、宮人がもっと自分に正直になって、愛を告白し、彼女を抱きしめていたら、彼女を死なせずに済んだのだろうか。それで彼女を幸せにすることができたのだろうか。いや、そんなことをすれば、彼女は宮人を純愛を汚そうとする、汚らわしい男として拒絶したかもしれない。

宮人はさびしい想いに胸が張り裂けそうになりながらも、純愛を永遠のものにするために死

を選んだ純粋な魂を讃えようと思った。

みつみつし 久米の若子が い触れけむ
磯の草根の 枯れまく惜しも

「いかめしく強い」という意味の「みつみつし」は「久米の若子」の枕詞である。勇猛な久米の若子が手に触れたという磯の草根が枯れるのは惜しいという意味になる。磯の草根は浜で兵士の帰りを待つ漁師の娘なのだ。漁師の家では海に出て漁をしたり、交易や戦に出かけるのは男たちである。娘は磯の草根として浜で待ち続けなければならない。そして男が帰らなければ、女は枯れてしまうしかないのである。たとえ一夜の契りであったとしても、その契りが真実であり、そこに永遠の愛を感じたのなら、娘はたとえ白髪になろうともその男を待ち続けるのだ。

そしてその男が死んだときには、その哀しみに耐え切れず自死するか、永遠の愛の思い出を抛り所に一生を終えるのである。もし宮人がその娘を愛さなかったら、あるいは白髪まで思い出に生きようとしたかもしれない。それを宮人は枯らしてしまつたのである。そう思うとき、宮人は罪の意識に苛まれた。

人言の 繁きこのころ 玉ならば
手に巻き持ちて 恋ひざらましを

この歌は誤解されている。久米の若子と娘の相聞歌と勘違いされているのである。人の噂がやかましくなつたのは、宮人が娘の死と絡んでいるのではないかという噂がたつたからである。娘の妹は姉から苦しい胸のうちを聞いていたから、宮人と娘の関係が清らかなものであることを分かってくれていたが、周囲のものは、本当に久米の若子への愛に殉じたのか、それとも宮人に言い寄られたので、死ぬ気になつたのではないかと疑つたのである。娘の父親は、宮人が娘を犯して捨てたのではないかとまで宮人を詰

問した。

宮人は一言も娘に求愛の言葉は言わなかった。娘が若子との純愛に生きている以上、求愛は純愛への冒険である。宮人は燃え上がる恋の炎を、無理やり押さえ込んでいたのである。しかしかれの熱き想いに周囲のものが気づかないはずはない。惚れているのなら、堂々と父親を通して娘に求婚すればよいのである。若子は戦死したのだからなんの遠慮も要らないはずである。宮人の態度はなんとも煮えきれないように写ったのである。これが娘の親の正直な気持ちである。

でも娘への宮人の愛は、娘が若子を一途に思っているからこそ、その想いの深さに胸打たれたからこそであるのだから、いまさら娘を強引にわがものにするなどできようはずもないのである。宮人はあくまでもその心を隠そうとした。でも隠しても隠しても色にでるものである。娘は人だ。宝玉ではない、宝玉ならどんなに美しくろうと恋焦がれることはないのだ。

妹も我も 清の川の 川岸の
妹が悔ゆべき 心は持たじ

この歌も久米の若子と娘の相聞ではない。久米の若子は戦死し、娘はその哀しみに自死したのだから、この二人の関係は何も弁解する必要はないのである。問題なのは生き残った宮人の心である。宮人は娘の死が純愛に殉じたものであることを讃えた。「妹が名は 千代にながれむ」とまで讃えたのである。それは宮人の愛によって純愛が揺らいだことなどないと言いたいのだ。

しかし宮人の愛も純愛であり、全く穢れのない想いなのだ。娘の両親の立場からみれば、娘に求婚するのが最も純愛に見え、潔くみえるだろうが、そんなことをすれば余計に娘を苦しめるだけである。だからあくまで宮人は娘を慰め、元気づけることに徹したのである。その優しさは、娘の心に十分届いた。そして哀しみから癒され、強く生きようとさえしたのである。それ

でも娘はついには純愛に殉じる道を選んだ。それはもはや哀しみからではない。愛の永遠を信じ、心迷わせることなく、一筋の恋に生きるために死を主体的に選んだのである。宮人への想いが膨らんできそうになり、それでは一人寂しく死んだ若子が哀れだと思って死を選んだのである。その心根はやはり純粹である。宮人の優しさに心惹かれたからといって、若子への純愛はずこしも汚されていない。心惹かれたいとすれば人の優しさを感じるできない冷たい女だということになる。だから宮人の愛を感じて、それで若子の寂しさに思いやって若子の許にこうとする娘に、宮人は少しも悔いを与えるようなことをしていないのだ。ましてや、宮人は自分の気持ちをやましいと感じることなどないのである。

そこまで思い切るまでに、宮人も苦しんだ。自分の思いが娘を死に追い込んだことについて罪の意識にも苛まれた。また自分が娘を愛してしまったこと自体が、切なくて切なくて、死にたいくらい切なかったのである。宮人は歌に想いを託すことで、自らの愛を昇華し、娘の純愛を千代のものにまでした。そして宮人の歌は、「君が代」の本歌になった。そして「君が代」の本歌をたずねる『「君が代」の起源—「君が代」の本歌は挽歌だった』（明石書店、二〇〇五年刊）という現代の営みが、この純愛を再びよみがえらせたのである。



大阪哲学学校活動日誌 (「通信」31号発行以降)

- 2005 1.22.「大阪哲学学校通信」第31号発行
 1.22. 新年・会員参加者交流会
 2.12. 「与謝野鉄幹と『文壇照魔鏡』事件——言論史的視点から」…講師・木村 勲
 2.19. 定例運営委員会
 2.26. 〈知の歴史〉入門講座への扉
 「哲学入門書・案内書あれこれ」……………講師・木村倫幸
 3.12. 〈知の歴史〉入門講座・第1シリーズ
 「J・S・ミルとロバート・オーウェン—グラムシ的視点から」(1)
 ……………講師・山本晴義
 3.26. 「王朝交替史と記紀史観」……………講師・室伏志畔
 4. 2. 〈知の歴史〉入門講座・第1シリーズ
 「J・S・ミルとロバート・オーウェン—グラムシ的視点から」(2)
 ……………講師・山本晴義
 4.16. 〈知の歴史〉入門講座・第1シリーズ
 「J・S・ミルとロバート・オーウェン—グラムシ的視点から」(3)
 ……………講師・山本晴義

お知らせ

○大阪哲学学校催しの録音 CD-ROM

哲学学校の催しの録音を、個人の学習のために希望される方に、ウィンドウズ・メディア・プレイヤーで聴ける CD-ROM をお貸しします。費用は実費として五百円を基本とします（配布資料共）。なお、貸出対象は原則として会員・参加者に限らせていただきます。会員登録は随時受け付けています。☞申し込み・問い合わせは催しの受付または kihou-ha@xpost.plala.or.jp まで

○個人情報の取り扱い

会員・参加者から任意に提出いただいている個人情報（氏名・連絡先）は、運営委員長のもとで管理し、案内の送付など哲学学校の運営・活動に必要な限りで利用しています。会員に配布する名簿の類は作成していません。なお、会員同士の連絡につきましては、当事者間で直接に個人情報を開示しあうことを原則としますが、会員から問い合わせがあれば、理由や信頼性などを勘案して、運営委員長の判断で連絡先をお教えすることもありますのでご了承下さい。もちろん、ご本人に無断で会員外の個人や団体に情報を提供することはありません。退会（会費未納による自然退会も含む）後の個人情報は、今後の連絡不要と言われた方のものは抹消し、それ以外のものは残しています。情報廃棄を希望される場合はその旨お知らせください。以上は、現行の個人情報の取り扱いの方ですが、何か問題点をお気づきでしたら運営委員会で検討いたしますので、ご指摘をよろしく願います。

○「大阪哲学学校通信」第33号

「通信」第33号（次号）は、7月末に発行予定です。7月半ばごろをめどに原稿をぜひお寄せ下さい。ジャンル等は問いませんが、掲載については編集者・運営委員会にご一任ください。